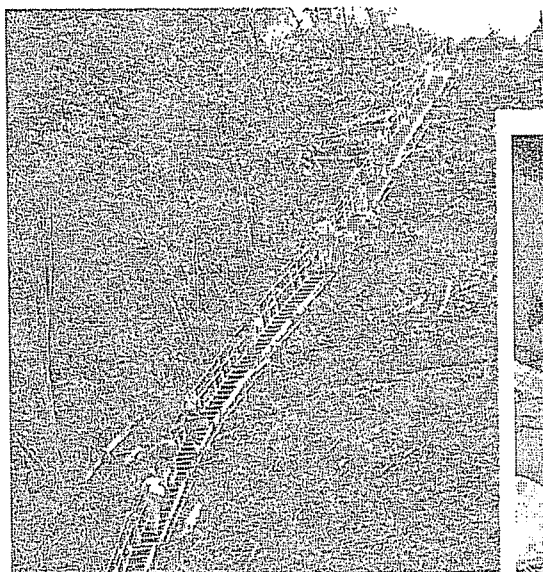


財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室

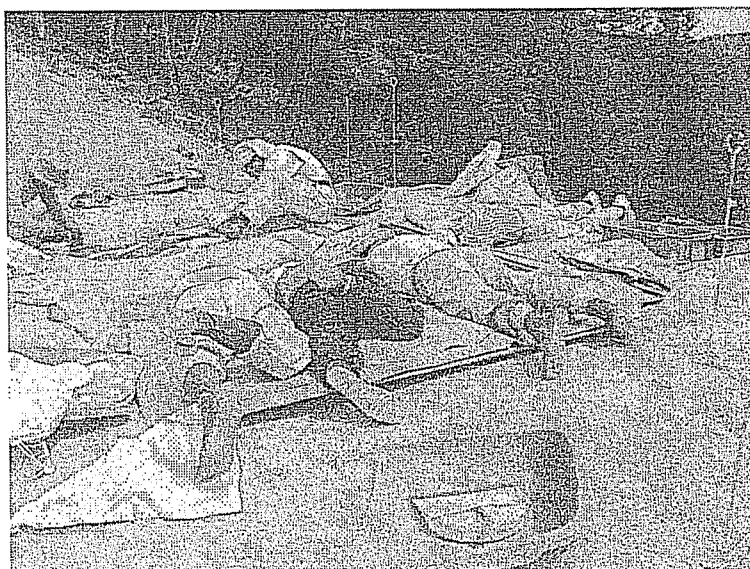
中国横断自動車道尾道松江線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告会資料

ちやうす
茶臼古墳 (三次市甲奴町宇賀)

よりとう
頼藤城跡 (三次市甲奴町小童)



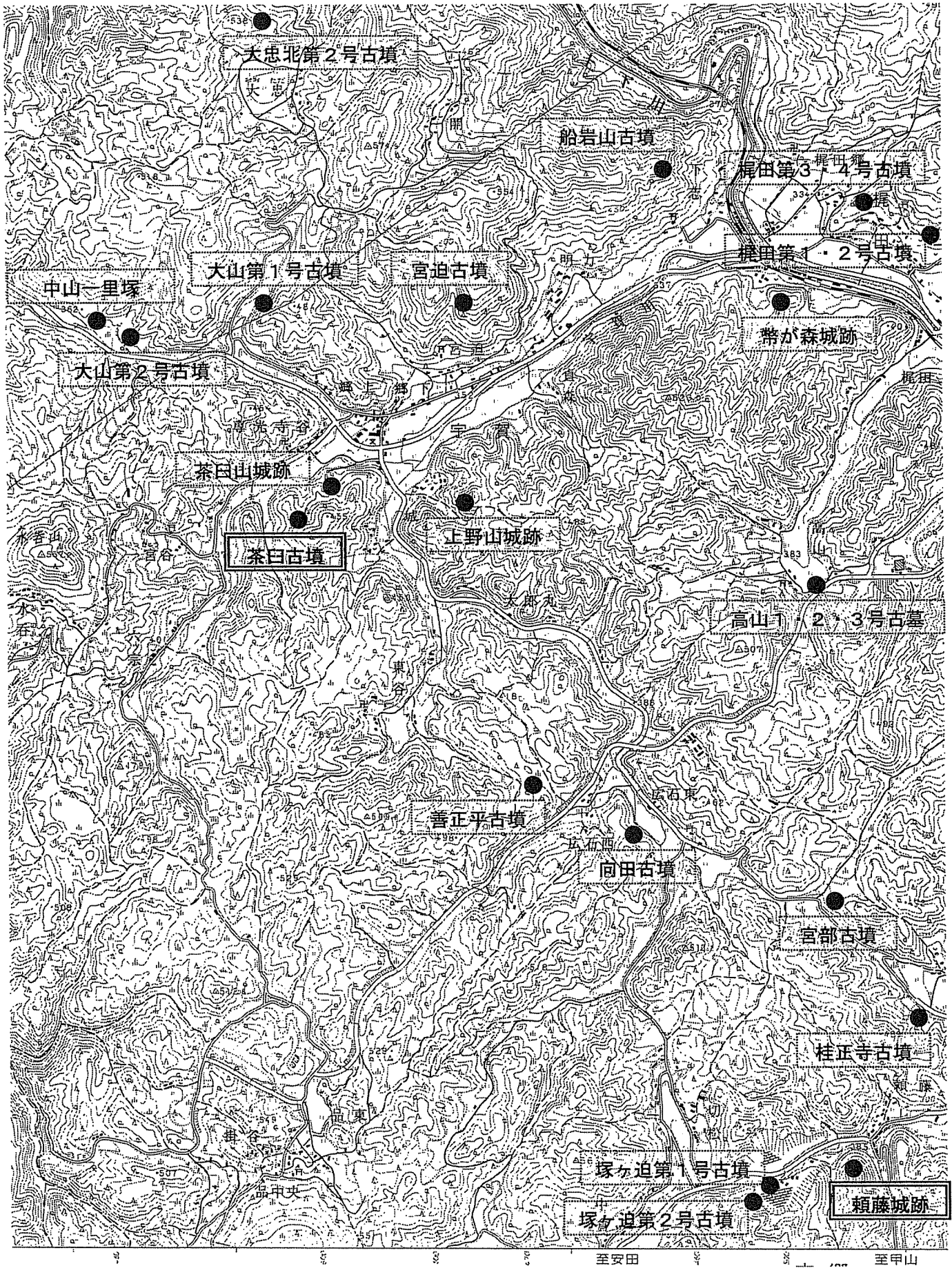
茶臼古墳への道



茶臼古墳 SK2 清掃風景

と き 平成20年9月27日 (土)

ところ 三次市甲奴コミュニティセンター



茶臼古墳・頼藤城跡位置図 (1 : 25,000)

1 茶臼古墳

位置と環境

茶臼古墳が位置する丘陵は、上下川に注ぐ宇賀川の西側にあたり、本古墳からは眼下に広がる宇賀の集落を望むことができます。この丘陵上にほかの遺跡は存在していませんが、近くには茶臼山城跡、上野山城跡が確認されています。

本古墳は、南から北に延びる尾根筋に立地しており、墳丘頂部の標高は414mで、東側と西側は急峻な斜面が続く、斜面下の水田とは約40mの標高差があります。

調査の概要

墳丘

北側と南側には尾根筋を直交方向に切る幅3.1m、深さ0.5mと幅3.1m、深さ0.4mの溝が掘られているため、本古墳の平面形は長方形に近いと言えます。墳丘の規模は南北12.0m、東西10.0m、高さ1.3mです。墳丘の下半分は礫を多く含む地層で、これを削って墳丘を形成しているため、葺石が施されているように見えます。古墳築造時に葺石をまねて、さらに墳丘の上半分の黄褐色土と下半分の灰白色の礫との色の違いを明確にすることで、美しさをねらったとも考えられます。



墳丘検出状況 北西から

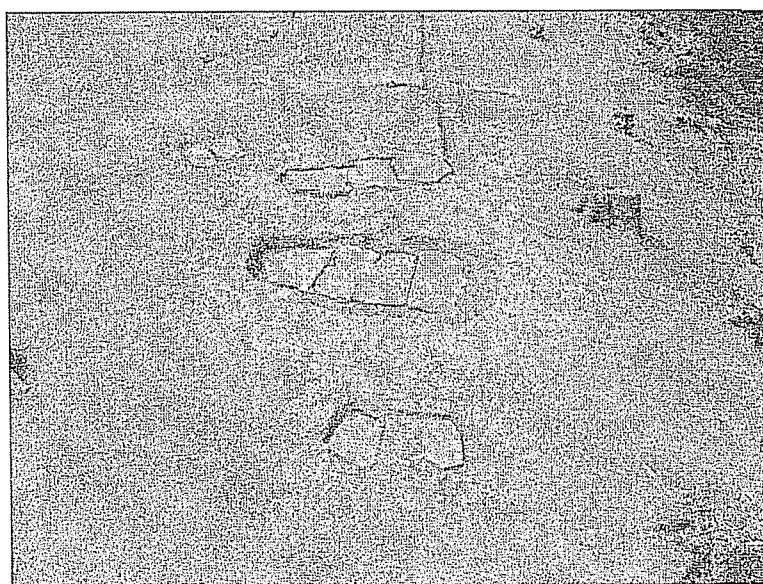
埋葬施設

埋葬施設は「川」の字状に並ぶ箱式石棺3基で、頭位はいずれも宇賀の集落方向である東です。

北側の箱式石棺（SK1）は、内側の大きさが長さ1.6m、幅0.25～0.4m、深さ0.3mで、蓋石に5枚の石材を用い、側石に5枚と7枚、両小口に各1枚の石材を縦長に使用しています。

中央の箱式石棺（SK2）は内側の大きさが長さ1.7m、幅0.35～0.6m、深さ0.4mで、蓋石に4枚の石材を用い、両側石に各4枚、両小口に各1枚の石材を縦長に使用しています。

南側の箱式石棺（SK3）は、内側の大きさが長さ0.7m、幅0.2～0.25m、深さ0.15mの小型です。



箱式石棺検出状況 南から

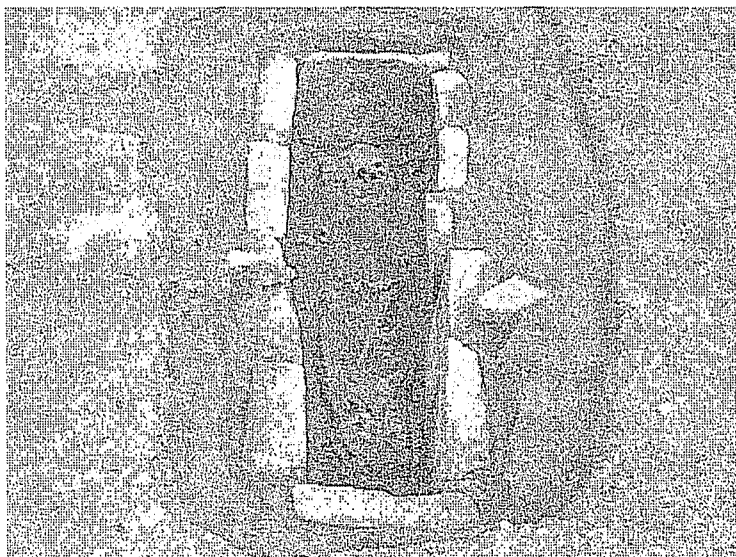
蓋石は後世の攪乱を受けて2枚のみ残り，両側石に各4枚，両小口に各1枚の石材を縦長に使用しています。SK1の近くにある2枚の石材は動かされたもので，本来はこの2枚を足して4枚の石材が蓋石として用いられた可能性もあります。

SK1～3に使用されている石材は，ほとんどが厚みのほぼ揃った平たい板石で，箱式石棺を作るために加工されています。SK1・3には在地の石材（流紋岩か）を，SK2には主に他地域の石材（花崗岩）を使用しています。SK1・2の内部は赤褐色で，特に頭部周辺の石材内側の赤みが強く，赤色顔料が塗られていました。SK3も，一部に赤色顔料の痕跡が見られることから，SK1・2と同様に内部に塗られていたと思われます。

石棺を納める穴は，3基の埋葬施設とも石棺より2～10cm広い程度で，石材を組むための最小限で済ましています。また，盛土の検出状況から，3基の埋葬施設を築造後，盛土をしたものと考えられ，3基の埋葬施設の築造に大きな時期差はなかったと思われます。



箱式石棺蓋石除去後 西から



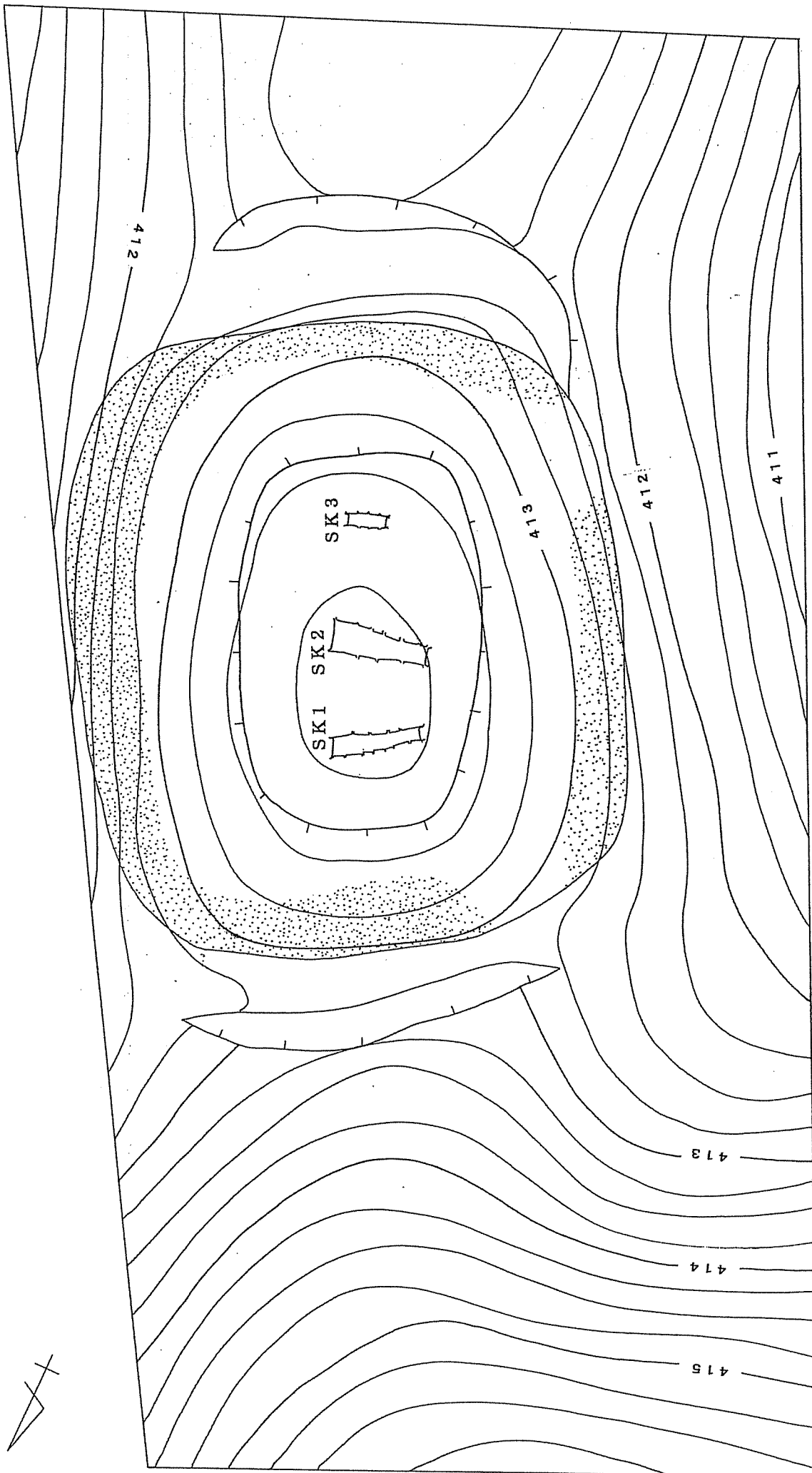
SK2人骨出土状況 西から

出土遺物

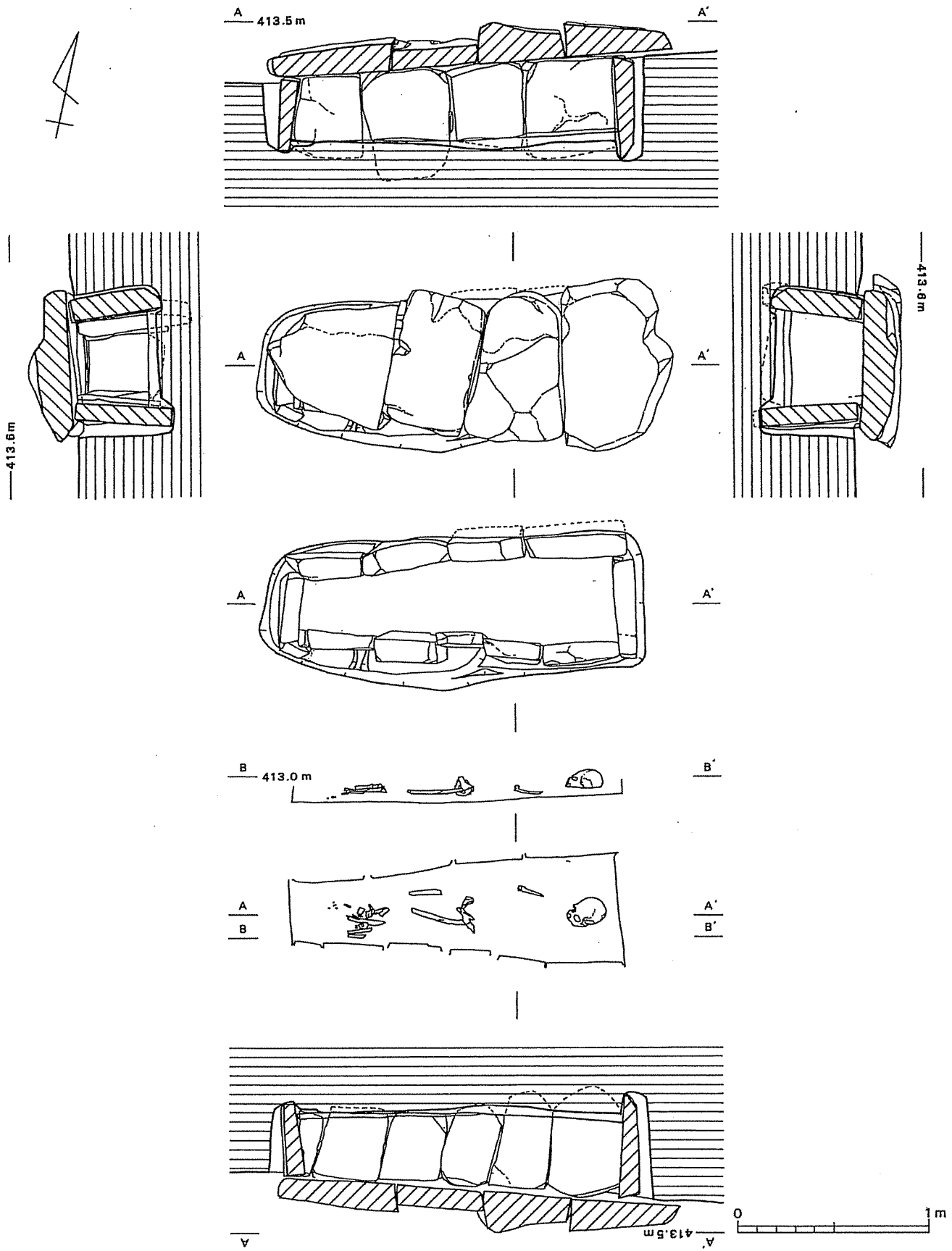
SK1・2は，石材間を粘土で丁寧に目張りし，蓋石の上面も粘土で覆った未盗掘の状態でした。そのため，SK1からは枕として使用された石の上から頭蓋骨の一部が，SK2からは頭蓋骨，上腕骨，仙骨，寛骨，大腿骨，歯など一体分の人骨が出土しました。また，SK2の頭部の両側から合計16点の緑色や青緑色のガラス小玉と，赤く塗られた面や僅かな突起をもった粘土片が数点出土しています。この粘土片は，枕など何かの目的で使用された可能性もあります。SK3からは遺物が出土していません。

まとめ

古墳の築造時期は，墳丘や埋葬施設の形態，出土遺物などから，5世紀中頃と考えられます。今回の発掘調査では，未盗掘の，しかも粘土で丁寧に目張りされた状態で埋葬施設が確認され，この地域の古墳時代の埋葬方法，社会の様子を知る上で，貴重な資料を提供するものです。



茶臼古墳 墳丘測量図 (1 : 100) (アミ目は、墳丘裾の礫の範囲)



茶臼古墳 箱式石棺 (SK 2) 実測図 (1 : 30)

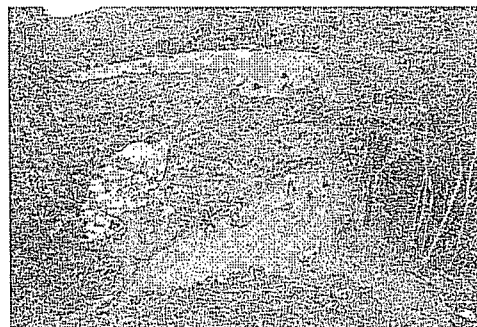
2 頼藤城跡

位置と環境

頼藤城跡は三次市甲奴町小童^{ひもと}に所在し、上下川支流小童川南岸の丘陵上に立地します。南から北に延びる尾根の北端に築かれており、全長約200mでL字形を呈しています。最高所の標高は473.3mで、周囲との比高は約80mです。尾根幅は狭く、両側は急峻な地形になっています。

調査の概要

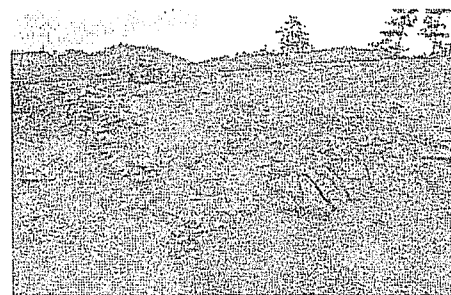
郭のまともりは中央の第1郭群、南の第2郭群、北の第3郭群に大きく分けることができます。第1郭群と第2郭群の境には大規模な堀切がありますが、この部分は鞍部であったものをさらに掘り込んで、広く深い堀切にしたものと思われます。今回の調査では堀切の東半分を調査しました。



第2郭群・堀切作業風景

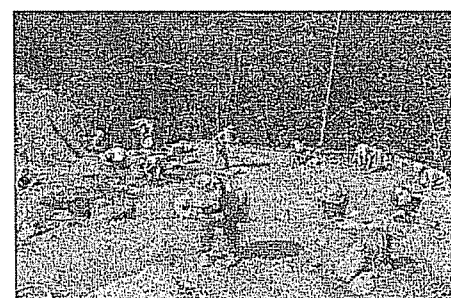
第1郭群

第1郭群は本城跡のなかで、標高が最も高く465～473mです。規模も大きく、本城跡の中核となる郭群です。大小24か所の平坦面を確認し、4棟の掘立柱建物跡を検出しました。南端の郭は西側と東側に土塁を伴い、2間×2間の建物跡(SB3)を検出しました。これらの土塁は平坦面を造成する際、地山を削り残すことによって造り出されています。西側の土塁は長さ7.7m、上部の幅0.4～1.0m、高さ0.25～1.15m、東側の土塁は長さ9.4m、上部の幅0.7～1.2m、高さ0.15～1.2mです。本郭群の最高所北側にある郭では、2間×2間の建物跡(SB1)を確認しました。また、東端と北端の一部に石列が見られます。東端の石列3は長さ4.4m、北端の石列4は長さ1.3mで、いずれも石が面を揃えて並べられています。この郭の北に隣接する郭も西端と北端に石列を伴い、西端の石列1は長さ5.6m、北端の石列2は長さ2.6mです。



石列3・4

また、1間×2間の建物跡(SB2)を検出しましたが、平面形は方形でなく、台形です。南東の郭でも1間×2間の建物跡(SB4)を検出し、この建物の南側斜面で炉跡を確認しました。炉跡は長円形で、大きさは長径0.75m×短径0.6m、深さ0.35mで、焼土や炭化物が充満していました。なお、本郭群の西側に細長い平坦面がいくつかあり、通路として使用されていた可能性が考えられます。また、本郭群がある尾根は岩石が多く、西斜面には人為的にやや大きな自然石を残しています。さらに郭の先端部にも自然石を多く残すという傾向が見受けられます。



南端郭作業風景

第2郭群

第1郭群の南にある第2郭群は、東に向かって派生する支尾根上に造られており、標高は453～468

mです。東端は調査区外に延びていますが、調査区内で大小11か所の平坦面を確認しました。最高所にあたる西側の平坦面が最も広く、東に向かうにつれ平坦面の規模は次第に小さくなっています。中央付近には北側に土塁を伴う郭があります。この土塁は地山を削り残すことによって造り出したもので、長さ5.0m、上部の幅0.8～2.6m、高さ0.5～1.0mです。本郭群からは建物跡等の遺構は検出されず、遺物も出土しませんでした。第1郭群の背後を固める補完的な機能があったものと思われる。なお、南西部には堀切を設けておらず、尾根続きになっています。

第3郭群

第3郭群は第1郭群の北にあり、標高は446～458mです。第1郭群とは尾根続きになっていますが、その間には高低差約8mの急な切岸があります。発掘調査前の地表観察では、この境の部分に堀切があると想定されましたが、表土を除去したところ岩盤が拡がり、堀切は造られていませんでした。本郭群は全般的に岩盤が拡がっている部分が多く、8か所の平坦面を確認しましたが、いずれも小さく狭いものです。中央の郭で1間×2間の掘立柱建物跡（SB5）を確認しました。



SB5完掘

出土遺物

遺物は、第1郭群と第3郭群から出土しました。第1郭群のものは、土師質土器（皿・杯・すり鉢）が中心です。陶磁器類は青磁碗が数点出土していますが、陶器は出土していません。青磁碗は15世紀代のものも見られますが、15世紀末から16世紀初めと推定されるものが中心です。その他、古銭（開元通宝・元符通宝）・鉄製品（短刀・刀子・鉄釘など）が出土しました。遺物は全般的に建物跡周辺から多く見つかっています。第3郭群からは、土師質土器（皿・杯・鍋）や亀山焼（甕）などがSB5の北東側の平坦面から出土しました。

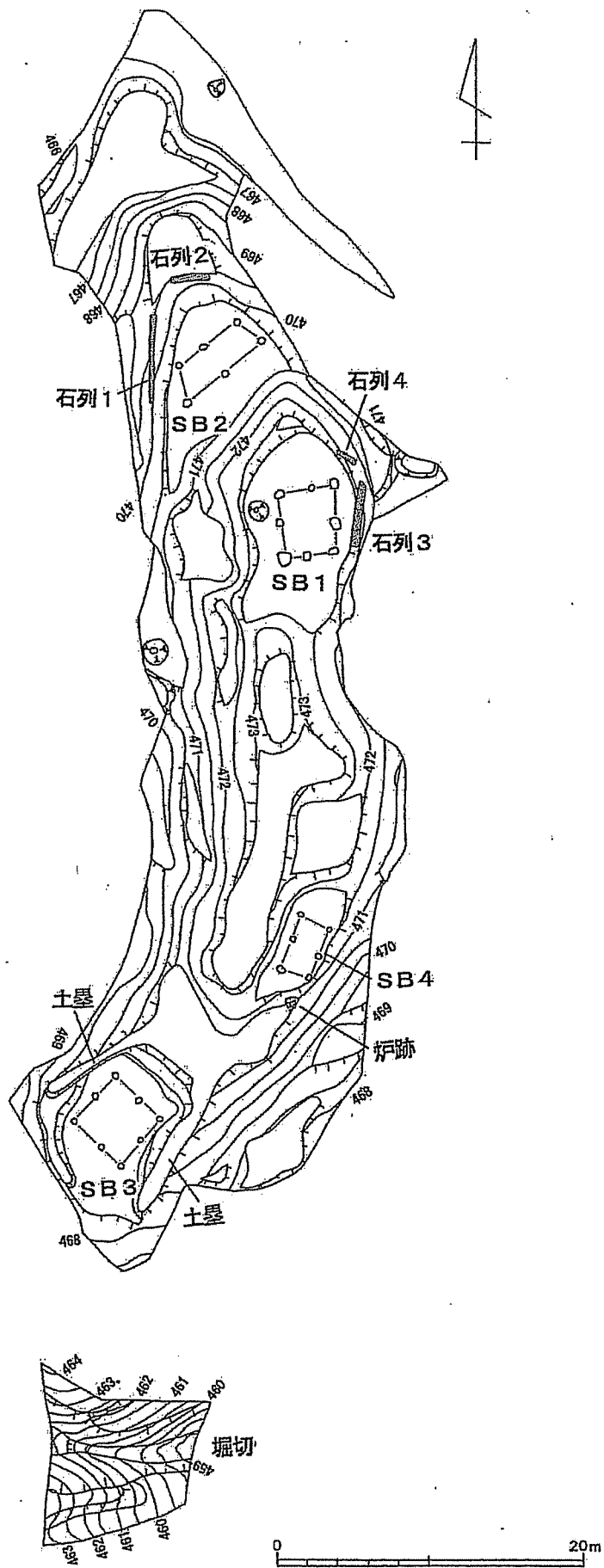
まとめ

甲奴町小童は、中世には「小童保」という京都八坂神社（祇園社）の荘園であり、土地をめぐる紛争がしばしば起きた所です。頼藤城跡はその小童の南端付近に位置しています。本城跡の北側は、本城跡の両側を南から下ってきた道が合わさり、さらに小童の中心部に向かう三叉路で、小童への南からの進入路を見張ることができます。規模としては中規模の城跡ですが、郭や堀切・土塁の配置、郭の先端部や第1郭群の西側斜面などに人為的に自然石を残していることなどから、自然地形をうまく利用して造られた城ということがいえます。また、核となる郭に建物を建てていることも注目されます。出土遺物が少量で、建物の建て替えが行われていないところから、この城跡は長期間使用していないものと思われる。

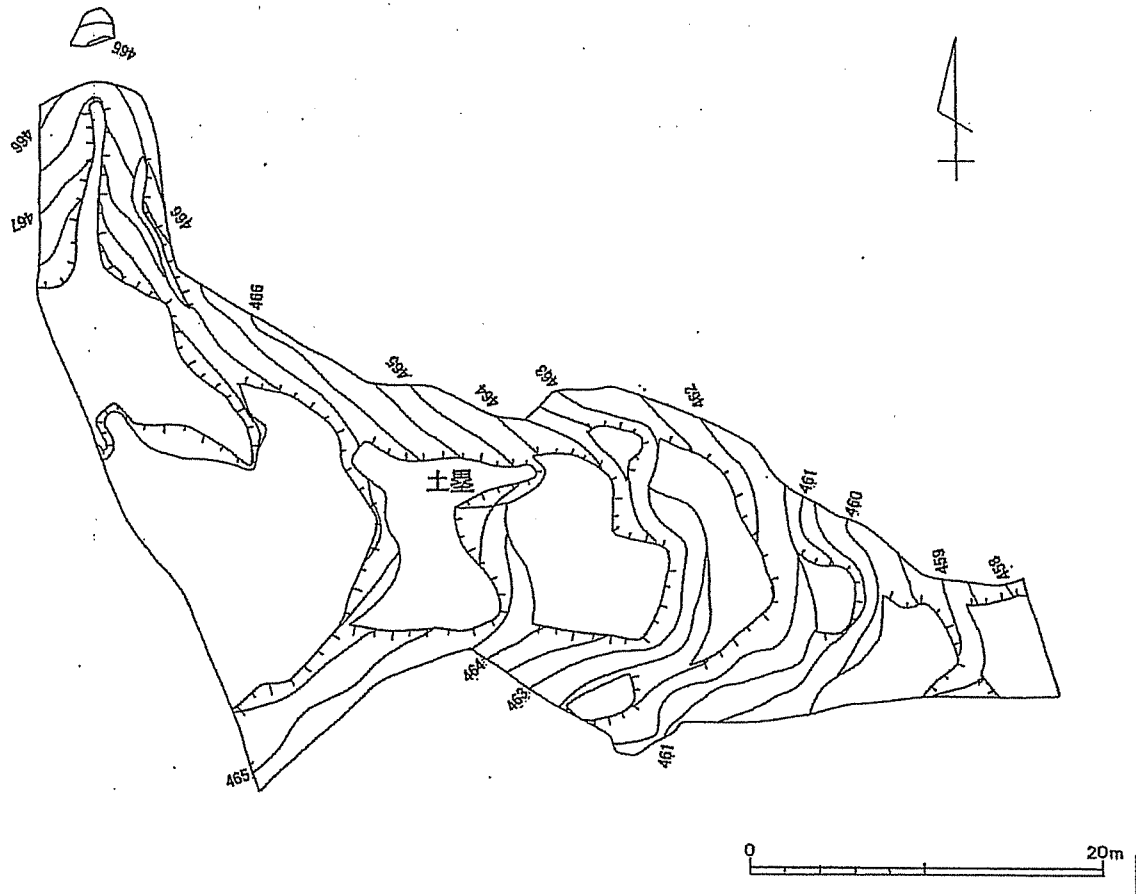
今回の調査は、この地域の室町時代後期（いわゆる戦国時代）の歴史を考えるうえで貴重な資料となりました。



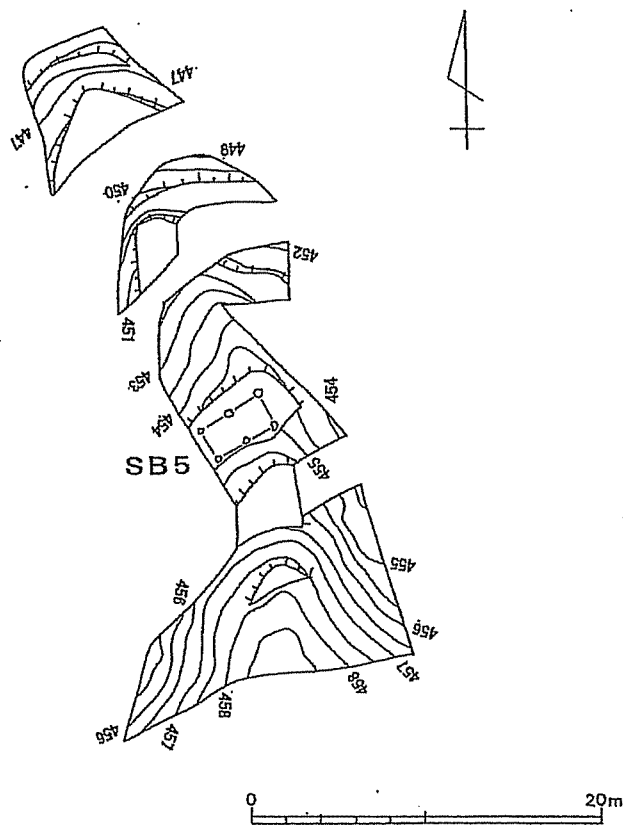
頼藤城跡発掘調査地点図 (1 : 1,000)



賴藤城跡第1郭群遺構配置圖 (1:400)



頼藤城跡第2郭群遺構配置図 (1:400)



頼藤城跡第3郭群遺構配置図 (1:400)

